

エレミヤ書 9：22～23

ルカによる福音書 22：21～30

「だれが偉いか」

【前奏】

【招詞】 詩編 51：19

【祈祷】 司式長老

【聖書】 エレミヤ書 9：22～23、ルカによる福音書 22：21～30

【説教】 「だれが偉いか」

<最後の晩餐の席で>

先週は、十字架に架かれる前の、イエスさまと弟子たちの最後の晩餐のことが語られていました。この食卓は、イエスさま自らが整えられ、十二人の使徒たちと共にしたいと切に願って、彼らを招かれた食卓です。

この席でイエスさまは、これからご自分に起こること、つまり十字架の苦しみを受けて死ぬことの意味を、使徒たちに教えられました。

それは、イエスさまの裂かれる体、流される血は、すべて「あなたがたのため」。つまり使徒たちのためであり、罪に捕らわれた世のすべての者のため、わたしたちのためである、ということです。

イエスさまの十字架の死は、過越の祭りで屠られる小羊と同じです。その血によって、神さまの救いの御業が実現する。すべての者を罪から解放する、救いの出来事が実現する。そうして、すべての者が神さまの民として生きるための「新しい契約」を打ち立てて下さる。

そのために、イエスさまは十字架の死へと向かわれるのです。

そしてイエスさまはこの食卓を、今わたしたちの教会が守り続けている「聖餐」の食卓として定められました。この聖餐によって、わたしたちはイエスさまの十字架の死の意味を繰り返し覚え、救いの御業を繰り返し味わい、イエスさまの救いの恵みに繰り返し養われ、生かされ、神の民として歩んでいくのです。

<裏切り者、偉い者は誰だ>

さて、今日の聖書箇所は、このイエスさまの恵みの食卓で起こった出来事です。イエスさまはこれらの大切なことを語られた後に、このように言われました。

21節「しかし、見よ、わたしを裏切る者が、わたしと一緒に手を食卓に置いている。人の子は、定められたとおりに去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。」

「人の子は、定められたとおりに去って行く。」つまり、イエスさまは、神さまのご計画通りに、御心の通りに、死ななければならぬ、ということです。

だが、とイエスさまは言われました。「だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。」

だが、人の子を裏切る者がいる。神さまのご計画、神さまの御心に背き、逆らおうとしている者がいる、というのです。それは、22章の初めの方で語られていたように、祭司長や律法学者たちに、イエスさまを引き渡して金をもらおうとしている、ユダのことでした。

ユダは、神さまに背こうとしています。イエスさまの御心を見つめず、自分の思いに従おうとしています。イエスさまはそれをご存じでした。

しかしイエスさまは、このユダのためにも、ご自分の命を与えて救おうとしておられたのです。この恵みの食卓に、ユダも招いておられたのです。彼に、悔い改めを求めておられたのです。神さまの御心をこそ見つめることを、願っておられたのです。しかしユダは、そのイエスさまの御心を悟ることが出来ませんでした。

そして、さらにここで、そのようなイエスさまの思いを他所に、使徒たちの間に議論が起きました。23節「そこで使徒たちは、自分たちのうち、いったいだれが、そんなことをしようとしているのかと互いに議論をし始めた。」

つまり、彼らは、自分たちの中で犯人探しを始めたのです。自分たちの中に、そんな悪いやつがいるのか。そんなダメな、情けないやつがいるのか。それは誰だ。そんな議論です。

彼らは、イエスさまを裏切ることは、悪いことだと思っています。それは、その通りなのです。しかし、今それを、自分たちで裁こうとしている。誰かを見つけ出し、指摘して、非難して、暴こうとしている。

それは一方で、自分の正しさを証明したい。自分はそんな者ではないということを、明らかにしたい、ということでもあるのです。

だからこそこの議論は、すぐ次の24節にあるように、「自分たちのうちで誰がいちばん偉いだろうか」という議論に発展していきました。

この「偉い」という言葉は、「大きい」という言葉です。彼らは、自分たちの中で、誰が小さいか。誰が大きいか。それを決めることによって、人と比較をすることによって、自分の立ち位置を確認しようとしています。自分の正しさ、自分の居場所を確保しようとしています。誰が重んじられるべきだろうか。誰がここにいる使徒たちの中で、一番上で、正しくて、弟子としてふさわしい者だろうか。

…しかし、それは本当に、自分が何者であるかを知る方法なのでしょうか。

自分が誰かよりも大きいと分かれば、あの人よりマシだと、少し安心することが出来るのでしょうか。自分が誰かよりも小さいと分かれば、大きいと思われる人に妬む心を起こしたり、惨めさや卑屈さを感じたりしなければならないのでしょうか。

そしてこれは、使徒たちだけの話ではありません。教会に集い、繰り返し主の聖餐の食卓に与っているわたしたちもまた、結局、人の目を気にして。人と人、人と自分を比較して。そこで自分の位置を確認しようとしたり、自分を肯定しようとするところがあるのではないのでしょうか。

人に重んじられたい。尊重されたい。大切にされたい。誰だって、それは願うことです。しかしそのために、人を裁こうとする。自分を誇ろうとする。あるいは、人を妬んだり、自分を惨めに思ったりする。そうして、神さまを見つめるべき目が、人を見つめるようになり、自分を見つめるようになり、いつしか大切な恵みを見失うことになるのです。

…そうです。結局、ユダどころか、この使徒たちの中で誰一人、イエスさまの御前で、イエスさまの御心を見つめている者はいませんでした。

イエスさまがご自分の命を注ぎ出して、十字架の死の記念として下さったこの食卓で。

自分は神の御子がそこまでして下さるほどの罪を、神さまに対して犯しているということ。イエスさまの命と引き換えでなければ、もはや生きられない者だということ。そして、そこまで自分は神さまに生きることを望まれ、そこまで神さまに愛されている者であるということ。その御心をこそ、使徒たちはこのイエスさまの食卓で受け取るべきであったのです。

しかしこの時、使徒たちは、神さまの御前に自分がどういう者であるかを問うことなく、誰が上だ、誰が下だ、ということに捉われていました。

イエスさまの思いを見つめている者は、この食事の席にふさわしい心を持つ者は、この時、誰一人いなかったのです。

<仕える者のようにになりなさい>

このような使徒たちに、イエスさまは言われました。25～27節です。

「そこで、イエスは言われた。『異邦人の間では、王が民を支配し、民の上に権力を振るう者が守護者と呼ばれている。しかし、あなたがたはそれではいけない。あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようにになり、上に立つ人は、仕える者のようにになりなさい。食事の席に着く人と給仕する者とは、どちらが偉いか。食事の席に着く人ではないか。しかし、わたしはあなたがたの中で、いわば給仕する者である。』」

「あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようにになり、上に立つ人は、仕える者のようにになりなさい。」

イエスさまは、だれがいちばん偉いかを論じる彼らに、いちばん若い者のように、仕える者のようにになりなさい、と言われました。「仕える者のようになる。」それは単に、上の立場の人が率先して働きなさい、というような、単純なことではないでしょう。

ここでイエスさまは使徒たちに、どのようなことが「仕える者のようになる」ということかを教えられました。それは、ずばり「イエスさまのようになる」ということです。

イエスさまは、言われました。「食事の席に着く人と給仕する者とは、どちらが偉いか。食事の席に着く人ではないか。しかし、わたしはあなたがたの中で、いわば給仕する者である。」

この食事の席は、イエスさまが前もって用意され、弟子たちを招いて、与らせて下さったものでした。つまり、師匠であり、先生であり、主人であるイエスさまご自身が、弟子である使徒たちに給仕をして、仕えて、整えて下さった食卓だったのです。

しかも、この食卓の意味は、イエスさまがご自分自身を、使徒たち、また世のすべての者のために、すべてお与えにいなる、ということでした。使徒たちと、世のすべての人々を罪から救うために、ご自分の命を与えるということ。すべての人が、新しい神の民として生きる者となるために、ご自分の血を流すということ。すべての人を、十字架に至るまで、愛し抜くということでした。

これこそが、イエスさまが仰る、本当の意味での「仕える」ということなのです。

しかも、こうして誰よりも低くなり、下に降り、仕えて下さったイエスさまが、本来どのようなお方であったのか。わたしたちはそのことを見つめなければなりません。

この方こそ、本来、最も上に立つべきお方。最も大きなお方であったのです。まことの神の御子であり、世界のすべてを支配するまことの王であり、わたしたちを罪の支配から解放して、神のものとして下さる、まことの主人なのです。

この方が、ご自分を犠牲にして、わたしたちに仕えて下さる。それは、わたしたちが知る、この世の王や、主人の在り方とは、全く異なるあり方です。

25節ではこう語られていました。「異邦人の間では、王が民を支配し、民の上に権力を振るう者が守護者と呼ばれている。しかし、あなたがたはそれではいけない。」

世の王は、世の支配者、世の主人は、民の上に権力を振るって、人々を治め、上に立ち、偉大な者となっています。しかし、神の国に生きる者、イエスさまのご支配に生きる者は、それではいけない、と言われるのです。

なぜなら、神の国の王は、民のために、小さい者のために、罪人のために、これらの者を生かすためなら、自ら小さな者となり、低い者となり、罪人と呼ばれる者となり、御自分の命をも惜しまずに与えるような王だからです。

この王に、給仕されているわたしたちが。この王に、そこまで命を尽くして愛され、重んじられている、一人一人のわたしたちが。この王の前で、どうして互いに、誰が大きい、誰が小さいか、と論じ合うことが出来るでしょうか。誰が、自分を大きく誇ったり、人を小さく見下したりすることが出来るでしょうか。

ですからイエスさまは、ご自分の命を尽くして仕えて下さったわたしたちもまた互いに、誰も高ぶることなく、むしろ小さな者に対して、愛をもって仕える者となること。相手が命を得るために、自分を与える者となることを、求めておられるのです。

<確かな約束>

しかしそれは、わたしたちが自分の決意や覚悟によって、実現できることではありません。わたしたちはまず、自分が傲慢な罪人であることを悟らなければなりません。そして、自分がイエスさまに仕えられて、生かされている者であることを知らなければなりません。

まずわたしたちの根底に、命を注ぎ出して仕えて下さったイエスさまがいて下さること。そして、この方に支えられて、生かされて、愛されて、力を与えられることを知ってこそ、わたしたちは初めて、御心に従って生きる者となることが出来るのです。まず、イエスさまの食卓に招かれて、仕えていただいて、命を頂いて、イエスさまの十字架と復活の恵みの中に立たされてこそ、わたしたちもまた仕える者となることが出来るのです。

28節以下で、イエスさまは使徒たちにこう語られました。「あなたがたは、わたしが種々の試練に遭ったとき、絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた。だから、わたしの父がわたしに支配権をゆだねてくださったように、わたしもあなたがたにそれをゆだねる。あなたがたは、わたしの国でわたしの食事の席に着いて飲み食いを共にし、王座に座ってイスラエルの十二部族を治めることになる。」

ここでイエスさまは、このイエスさまの食卓で、今まったくふさわしく歩むことの出来ない使徒たちが、やがてイエスさまの支配権を受け継ぎ、イエスさまと共に飲み食いし、王座に座る者になるということを、予告なさっています。

ここには、「あなたがたは、わたしが種々の試練に遭ったとき、絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた。」とあります。

しかし、わたしたちは知っています。イエスさまの最も過酷な本当の試練は、十字架の苦しみは、むしろこれから始まるということ。そして、その時に使徒たちは、誰一人イエスさまと一緒に踏みとどまることが出来なかった、ということです。

でも、30節のところは、未来のこととして語られています。「あなたがたは、わたしの国でわたしの食事の席に着いて飲み食いを共にし、王座に座ってイスラエルの十二部族を治めることになる。」

イスラエルの十二部族。これは、十二人の使徒たちから築かれる、新しいイスラエル、新しい神の民、つまり教会のことを表しています。使徒たちが、教会の指導者として立てられ、イエスさまを信じる者たちの群れ、神の民が興されていくということです。

そうであるならば、「わたしの国でわたしの食事の席に着いて飲み食いを共にする」とは、まさにこの時にイエスさまが定めて下さった聖餐の食卓を使徒たちが受け継いで、イエスさまの十字架と復活の御業の後に、記念として行なっていくということでしょう。

十字架の前にイエスさまを見捨てて逃げ出した使徒たちは、三日の後に、復活なさったイエスさまと出会います。そして、イエスさまの昇天の後、聖霊が降り、この使徒たちが福音を宣べ伝え、イエスさまを信じる者たちの群れ、新しい神の民を集めていくのです。そうして、この使徒たちの働きを中心に、教会が築かれていきました。

使徒たちは最初の教会の指導者となり、イエスさまの福音を、命がけで伝えました。それは、自分たちが与った罪の赦しに、一人でも多くの者が共に与るためです。自分が生かされている命に、恵みに、一人でも多くの者が共に生かされるためです。

使徒たちは、確かにイエスさまが十字架に架かれ、死ぬ時には、見捨て、逃げ出し、イエスさまの最大の苦しみの時に、試練の時に、共に踏みとどまることは出来ませんでした。イエスさまから去っていきました。

しかし、彼らは、イエスさまに仕えていただいたことによって、罪を赦され、命を与えられ、聖霊を注がれたことによって、イエスさまの下に立ち帰らされたのです。罪を赦され、新しくされたのです。何が起こっても、イエスさまの下にこそ、固く踏みとどまる者とされたのです。そうして、命をも惜しまずに、人々にこの福音を伝える者とされたのです。

なぜなら使徒たちは、そうしてイエスさまと共に歩むことこそ、試練や迫害に遭う苦しみ以上の、大きな喜び、大きな恵み、大きな祝福があることを確信できたからです。

やがて彼らは教会の指導者、つまり上に立つ者となりました。そして彼らはこの時には、まさに仕える者として、神さまの御心のために仕え、救いのために人々に仕え、イエスさまの十字架の御跡に従う者とされたのです。

29 節でイエスさまは、「だから、わたしの父がわたしに支配権をゆだねてくださったように、わたしもあなたがたにそれをゆだねる」と言われました。

「支配権」とありますが、これは「王国」という言葉です。神の国です。それは使徒たちが宣べ伝えた福音によって立てられた教会に、神さまのご支配が、神の国が、現わされるということです。

そうして、御言葉が宣べ伝えられ、復活し、生きておられるイエスさまの恵みの食卓が、教会において備えられ、その席に、一人、また一人と招かれるのです。イエスさまが仕えて下さり、救って下さる恵みの食卓です。そうして、イエスさまの十字架を覚える聖餐の食卓に着く弟子たちが、次々と増し加えられていく。そこに神の国が、神の恵みのご支配が広がっていく。教会は、そのように神さまの救いの恵みが、実現するところとされていくのです。

ですから 28 節以下は、イエスさまの十字架と復活によって、罪の赦しに与った使徒たちが、イエスさまの聖餐の食卓を受け継ぎ、新しい神の民をこの食卓に招き、教会を築き上げていくことの、確かな約束がなされている、と言って良いでしょう。

そして、わたしたちもまた、この約束の実現にあずかって、イエスさまの食卓に招かれ、イエスさまに給仕され、十字架によってその命を与えられ、今、この礼拝で、神の民として、生かされる者となったのです。聖餐の食卓に与る者となったのです。

そして、イエスさまに仕えられた者として、ここから、わたしたちもまた、仕える者とされていく。目の前の人がまことの命に与るために、まことに生きる者となるために、福音を宣べ伝える者として、人々に仕える者として、隣人を愛する者として、召されているのです。

<変えられていく>

イエスさまの最後の晩餐の席で、その席に着くのにふさわしかった者は、誰もいませんでした。しかし、それでもイエスさまは御許に招いて下さるのです。そして、イエスさまは、招いた者たちに仕えて下さり、その命を与えて下さり、罪人を神の子へ、死ぬ者を生きる者へ、ふさわしくない者をふさわしい者へと、新しく造り変えて下さるのです。

わたしたちにもまた、イエスさまが仕えて下さり、共にいて下さいます。ご自分の命を与えて下さり、罪を赦して下さい。わたしたちが神さまから離れても、迷っても、倒れても、立ち上がらせて、手を引いて、背負って、神さまの許に立ち帰らせて下さいます。そして、何度でも新しくして下さい。力を与えて下さいます。イエスさまと共にある喜びを教え、試練に遭っても、イエスさまの下に踏みとどまる力を備えて下さいます。繰り返し、主の食卓に、聖餐に、招いて下さいます。やがては、天の祝宴に、席が用意されています。

使徒たちもそうであったように、わたしたちもまた、はじめから、神さまの望んで下さるように、ふさわしく歩めるものではありません。

しかし、聖餐の食卓に招かれる度に、イエスさまの恵みを受け止める度に、十字架の死の意味を受け止める度に、神さまの愛を知る度に。わたしたちは、確かに、神さまの民としてふさわしい群れへと、新しく変えられていくのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

あなたの御心を思わず、イエスさまの十字架を見つめず、御前に立ちながら、自分のこと、人のことばかりを見つめ、誇ったり、惨めになったり、人を軽んじたり、妬んだりする、罪深いわたしたちの歩みをお赦し下さい。

イエスさまが、わたしたちの最も低いところに身を置かれ、わたしたちに仕えて下さり、その命さえ惜しまず与えて下さったことを、常に覚えさせて下さい。

そして、イエスさまの恵みに立つ中であって、わたしたちもまた、神さまの愛をもって人に仕える者、人を生かす者、人を愛する者となる事が出来ますように。どうかわたしたちを御心に適った者へと、新しく造り変えて下さい。

そして、さらに主の食卓に、あなたの恵みの下に、一人でも多くの者が招かれますように。

イエスさまの御名によって祈ります。アーメン

【讚美歌】 5 1 3 「主は命を」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讚美歌】 2 9 「天のみ民も」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン